

平成 27 年度 国立赤城青少年交流の家 教育事業

あかぎ多文化共生推進事業 実施報告書

落合 哲郎（国立赤城青少年交流の家）

はじめに

現在 107 ヶ国の 4 万人を超える外国人が住む群馬県。特に伊勢崎市や大泉町などは、在留外国人総数が全国でも上位になる。その中には様々な壁により、日本社会への適応がスムーズに進まない多くの青少年も含まれている。

学校の学習指導要領においても「体験」の重要性が指摘されており、日本人の子ども達は小学校・中学校で林間学校などの宿泊学習を行う。しかし、在日外国人学校において実施している学校は少ない。国内のブラジル人の半数以上が、永住者として在留するようになるなど、在留外国人の定住化が進む中、キャンプという非日常的な場において様々な体験活動を通じて心を開放し、仲間をつくり、日本の良さに気付く機会をつくることは重要である。

そのため、地域コミュニティづくりの一助になるよう国立赤城青少年交流の家は多文化共生推進事業を教育事業として平成 24 年度から取り組んでいる。

事業の概要

現在、行っているあかぎ多文化共生推進事業は次の 3 つに分類される。

①在日外国人学校プログラム支援

群馬県における在日外国人への体験の場を提供する。

②あかぎ多文化交流キャンプ

公立の 2 つの小学校に通う外国籍の親をもつ児童が、様々な体験活動を通して交流する。

教員や参加者の保護者は、子どもたちの様子を見守る。

③あかぎワールドキャンプ

国籍も様々、言語も様々な参加者を赤城に集めて交流キャンプを行う。

[ねらい]

- 1 様々な体験活動を通じて心を開放し、仲間をつくり、自信をつける機会をつくる。
- 2 国籍の異なる仲間との宿泊生活を通して、直接相手のことや文化を知り自分以外の価値観を認める考えを持つ。
- 3 ボランティア及び社会人スタッフが、多文化共生についての理解を深める。

第1回

あかぎ多文化交流キャンプ	
日程	平成27年8月19日～21日 1泊2日
会場	国立赤城青少年交流の家
参加者	アジア共同体学校(韓国釜山市の学校) 6名 ジェンテ・ミウダ(大泉町のブラジル人学校) 24名 日本の子ども達 15名 計45名
スタッフ	大学生ボランティア 20名 社会人ボランティア 10名 国立赤城青少年交流の家職員 2名 計32名
連携団体	あかぎワールドコミュニティ 釜山アジア共同体学校 前橋市、前橋市教育委員会、前橋市国際交流協会 高度人材育成事業実行委員会 特定非営利活動法人 多言語教育研究所 ジェンテミューダ(ブラジル人学校) など

<活動日程>

8月19日	8月20日	8月21日
11:00 はじめの会	6:00 起床	6:00 起床
12:00 昼食	7:00 朝のつどい	7:00 朝のつどい
13:30 あかぎアドベンチャー プログラム	7:30 朝食	7:30 朝食
17:30 夕食	9:00 自然散策	9:00 箸づくり
19:00 スポーツ大会	10:30 レクリエーション	11:45 昼食
21:00 入浴	12:00 流しそうめん	12:30 お別れ会
23:00 消灯	14:00 スイカ割り	13:00 解散
	17:00 ワールドパーティ (各国の食とダンスや歌など の文化を通じた交流活動)	
	21:00 入浴	
	23:00 消灯	

<活動の様子>



あかぎアドベンチャープログラム



箸づくり



流しそうめん



スイカ割り



ワールドパーティ①



ワールドパーティ②

第2回

あかぎ多文化交流キャンプ																
日時	平成27年9月5日(土)～6日(日) 1泊2日															
会場	国立赤城青少年交流の家															
参加者	<table border="0"> <tr> <td>太田市立宝泉小学校</td> <td>13名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>太田市立九合小学校</td> <td>10名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>太田市立宝泉中学校(宝泉小OB)</td> <td>3名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>太田市立東中学校(九合小OB)</td> <td>2名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>保護者</td> <td>3名</td> <td>計31名</td> </tr> </table>	太田市立宝泉小学校	13名		太田市立九合小学校	10名		太田市立宝泉中学校(宝泉小OB)	3名		太田市立東中学校(九合小OB)	2名		保護者	3名	計31名
太田市立宝泉小学校	13名															
太田市立九合小学校	10名															
太田市立宝泉中学校(宝泉小OB)	3名															
太田市立東中学校(九合小OB)	2名															
保護者	3名	計31名														
スタッフ	<table border="0"> <tr> <td>群馬大学多文化共生教育・研究プロジェクト推進室</td> <td>6名</td> </tr> <tr> <td>高校生ボランティア</td> <td>3名</td> </tr> <tr> <td>大学生ボランティア</td> <td>8名</td> </tr> <tr> <td>宝泉小学校・九合小学校教員</td> <td>6名</td> </tr> <tr> <td>国立赤城青少年交流の家職員</td> <td>2名</td> </tr> <tr> <td></td> <td>計25名</td> </tr> </table>	群馬大学多文化共生教育・研究プロジェクト推進室	6名	高校生ボランティア	3名	大学生ボランティア	8名	宝泉小学校・九合小学校教員	6名	国立赤城青少年交流の家職員	2名		計25名			
群馬大学多文化共生教育・研究プロジェクト推進室	6名															
高校生ボランティア	3名															
大学生ボランティア	8名															
宝泉小学校・九合小学校教員	6名															
国立赤城青少年交流の家職員	2名															
	計25名															
連携団体	群馬大学多文化共生教育・研究プロジェクト推進室 太田市立宝泉小学校 太田市立九合小学校															

<活動日程>

9月5日	9月6日
11:00 はじめの会	6:00 起床
12:00 昼食	7:00 朝のつどい
13:30 あかぎアドベンチャープログラム	7:30 朝食
17:00 タベのつどい	9:00 オリエンテーリング
17:30 夕食	11:00 振り返りカード
18:30 キャンプファイヤー	12:00 昼食
20:00 入浴・消灯	13:00 おわりの会

<活動の様子>



あかぎアドベンチャープログラム



あかぎで遊ぼう



キャンプファイヤー



振り返り



自然散策



終わりの会



成果と課題

【成果】

- ①ワールドキャンプのアンケートより、「どんな国の人でも同じ人間なんだと感じた」「日本とは違ったけど、どの文化もすばらしいと思った」という声が多くあり、様々な体験活動や宿泊を通じた直接的な関わりが、多文化共生に通じる考えの育成につながった。
- ②事業後に、自信をもった参加者が地域行事（前橋まつり）へ参加し、神輿を担いだり地域の方々と交流したりする等、キャンプ後に地域へ溶け込むきっかけとなった。
- ③本事業を通して支援を続けていた在日外国人学校が自分たちでプログラムを行えるようになり、自然体験が行いやすい環境になった。
- ④昨年度に発足したあかぎワールドコミュニティ（略称 AWC）は、多文化共生の実現に向けての継続的な活動ができるように、会則や会員などを整えて自立した団体として動き始めた。今年度においては、ワールドキャンプの運営を AWC が行い、独自に企業や個人による協賛や支援を集めたり、地元の教育委員会や大学生と連携して日本人の参加者やボランティアスタッフを集めたりした。市民・企業・行政の三者の協力で、活動が持続可能になることを目指している。

【課題】

- ①ワールドキャンプのアンケートにおいて、参加者が「大変だったこと」として「言葉がちがう国の人とコミュニケーションをとること」「言葉を理解すること」をあげる人が多かった。一方、「これからの生活で生かしていきたいこと」において、「言葉を勉強して外国の人と仲よくなりたい」「国はちがうけど、がんばって伝えようとすれば伝わる」といった声も多くあり、言語の壁が同時にこれからの生活につながる成果を生んだことが分かる。
- ②ワールドキャンプ参加者の感想で、「一定の学校からの参加者が多いため、交わりが難しいと思った」という声があった。今年度、ワールドキャンプにおける子どもたちの人数比が、ブラジル人学校 24 人：日本人 15 人：韓国 6 人であった。学校ごとに様々な思いや金銭的な課題があり、人数比をそろえることが難しいのが現状である。
- ③外国においては集団宿泊という概念があまりないので、在日外国人にとっては「宿泊」自体に抵抗を感じてしまうことが多い。彼らには、施設職員や青少年教育施設になれてもらうという“はじめの一歩”から始めなければならないのが現状である。また、支援を続けてきた学校が、人事異動によりプログラムへの理解やノウハウがなくなってしまう

うことがある。根気よく継続的な支援を続けるとともに、効率的な支援ができるように対策を考える必要がある。

<引用文献及び参考文献>

- ・法務省 在留外国人統計（2014年12月末）
- ・内閣府ウェブサイト「日系定住外国人施策の推進について」